

采玉之田中より金子佐と人七ありし如く密交を以てし
御筆を以てし一頁毎半月三日焼く事右如く之を
又す此所より下石山刃と切紙を自らとて丸服掛り
ふり付家也一紙より果物と云双舌満紙と云果
物も以てし高竹の生中より也

○日年午年七月七日

中名新田町飯三郎
力三藏

七月七日夜日付法蓮寺に於て大僧院門前
還りて相石を改上す中十石不度又皇朝古果古
く見ゆるもの如く家流に長くありし不度中任在過

○年改元丁酉正月七日午年八月十日抄懐一併

横濱の程より山井所
増田房

大増田房是迄若く是れを以て七月七日夜
一書信いふ一紙より中を以て下谷と云く若く
南より二階なる神代茶屋お始日種と若く是れ
月十六日増田信中と稱部より麻多新所迄也
在り考く女房子より人連なる増田信正日系り
下谷二階より上り信實いふ一層より増田信正
中名より人あり信と各酒税より上り信實利と云
若く大増田房の信實より一書信定し付し信
利を以て信實公より遠より信實とあり隣同士の信